

〔 研究 主 題 〕

特別支援学校における指導内容の明確化に基づく授業に関する研究

－ 一人一人の確かな学びに応える個別の指導計画活用の工夫を通して －

1 研究のねらい

特別支援学校においては、児童生徒が所属する学習集団の全体指導計画と、児童生徒一人一人に応じて作成される個別の指導計画を関連させ、両者の調和を図りながら、児童生徒一人一人の教育的ニーズに応える授業実践を行っている（図1）。

個別の指導計画については、平成11年に特別支援学校学習指導要領に規定されてから、各特別支援学校において、その様式が検討され、作成の手引等も整えられてきている。このような状況の中で、個別の指導計画は、児童生徒への一貫性や系統性のある指導の充実のために、授業づくりなど

において活用されている。また、個別の指導計画は、指導に当たる教員間の情報共有や保護者との連携に係るツールとしても活用されているところであるが、児童生徒一人一人の教育的ニーズに応え、日々の授業における学習活動に結び付くものとして、その活用の充実が求められている。

そこで、個別の指導計画活用の状況等について、実態調査を基に現状と課題を明らかにし、全体指導計画と個別の指導計画に基づく、一人一人の教育的ニーズに応じた指導内容の明確化について整理をし、「何を、どのように教えるか」を明らかにして、児童生徒一人一人の確かな学びに応える個別の指導計画活用の提案を行う。

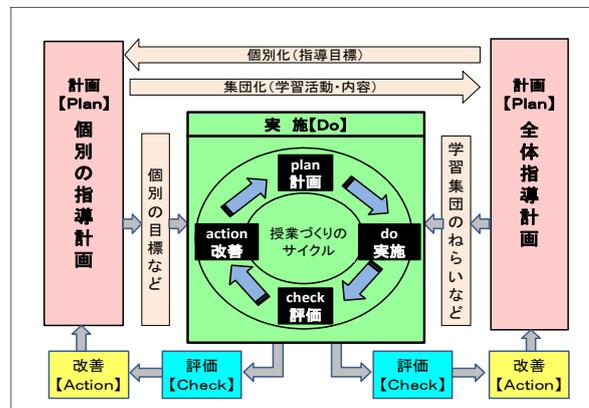


図1 個別の指導計画と全体指導計画を関連させた授業

2 研究の内容

- (1) 県立特別支援学校全16校における個別の指導計画活用に基づく授業に関する実態調査の実施
- (2) 全体指導計画と個別の指導計画に基づく、一人一人の教育的ニーズに応じた指導内容の明確化のための個別の指導計画活用の在り方の整理
- (3) 「何を、どのように教えるか」を明確にした確かな学びに応えるための個別の指導計画活用を通じた授業について、研究協力員による検証授業の実施
- (4) 実態調査の結果及び検証授業を通して整理した確かな学びに応える個別の指導計画活用に関する提案

3 実態調査の概要

- (1) 調査時期
平成28年10月
- (2) 調査目的
特別支援学校に在籍する児童生徒一人一人の指導の充実に関する個別の指導計画活用について、指導内容の明確化の視点から現状と課題を明らかにする。
- (3) 調査対象者
ア 県立特別支援学校全16校の個別の指導計画を作成した担任（858人）
イ 回答者等

| | | |
|-------|---|------|
| 回答者 | 小学校，中学校又は高等学校に準ずる教育課程及び下学年代替の教育課程で学習する児童生徒を指導する担任 | 130人 |
| | 知的障害及び重複障害の教育課程で学習する児童生徒を指導する担任 | 684人 |
| 合 計 | | 814人 |
| 回 収 率 | | 95% |

(4) 調査内容

ア 個別の指導計画を活用した授業の在り方について

- ・ 各教科等を合わせた指導「生活単元学習（以下，「生単」とする）」
- ・ 教科別の指導「音楽科」
- ・ 教科別の指導「国語科」

イ 個別の指導計画の全般的な活用状況について

(5) 調査方法

- ・ 質問紙調査法（多選択肢法）
- ・ 担任する児童生徒1人を想定した設問への回答

4 実態調査の結果

(1) 個別の指導計画の全般的な活用について

個別の指導計画には，一人一人の教育的ニーズに応じて日々の授業を充実させることや教員間の情報共有，保護者との連携に係るツールとしての役割がある。

この個別の指導計画の役割について，「実態に応じた指導」，「前担任からの引継ぎ」，「教員間の情報共有」，「学習の履歴の確認」，「保護者への指導事項の伝達」という観点に基づいて，担任の意識の調査を行った。

その結果，個別の指導計画が役立っていると「思う」という回答は，「実態に応じた指導」45%（図2），「保護者への指導事項の伝達」49%（図3），「前担任からの引継ぎ」52%（図4），「教員間の情報共有」40%，「学習の履歴の確認」33%であった。

ほぼ全ての特別支援学校において，担任のおよそ半数が，「実態に応じた指導」（図2）より「保護者への指導事項の伝達」（図3）や「前担任からの引継ぎ」（図4）としての活用において，個別の指導計画が役立っていると「思う」という実感をもっているということが分かった。

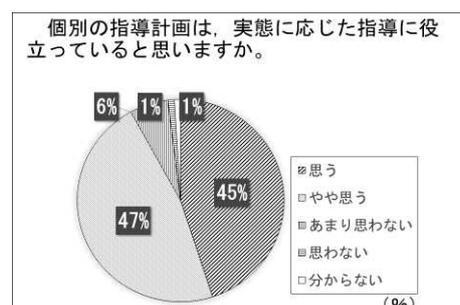


図 2

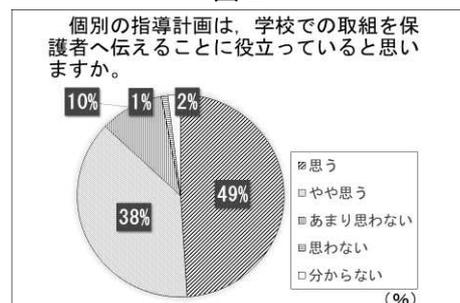


図 3

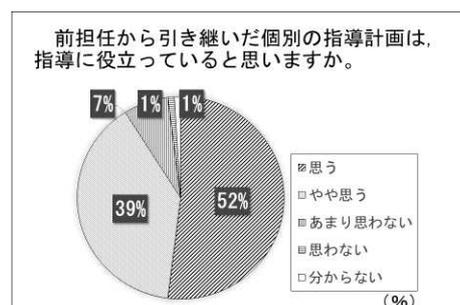


図 4

また、個別の指導計画の「実態に応じた指導の役立ち感」について、特別支援学校の教員経験年数別に分析した結果（図5）、個別の指導計画が「実態に応じた指導」に役立っていると「思う」と回答した割合は、経験年数に関わらず、39～54%であり、ほぼ半数の担任は個別の指導計画が実態に応じた指導に役立っていると回答している。

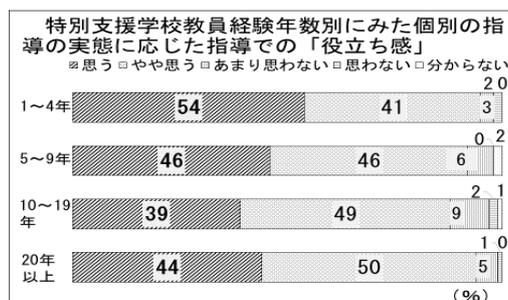


図5

(2) 個別の指導計画を活用した授業の在り方について

個別の指導計画に基づく授業に関して、「授業のつながり」、「指導内容の明記」、「指導内容の習得状況」、「役立ち感」の観点から調査を行った。

その結果、全ての観点に対して、70～80%程度の担任が「思う」、「やや思う」と肯定的に回答をしている。指導の形態によっては、若干の違いはあるものの、「個別の指導計画は、授業とつながっており、実際の指導に役立っている」と感じている担任が多いということが分かった。

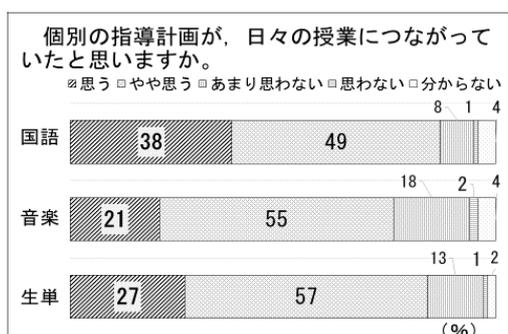


図6

具体的には、「個別の指導計画が日々の授業につながっていたと思うか」（図6）については、国語87%、音楽76%、生単の84%が「思う」、「やや思う」と回答している。また、「教えたことが、単元・題材の指導開始前に個別の指導計画に示されていたか」（図7）との問いでは、国語82%、音楽71%、生単の80%が「思う」、「やや思う」と回答しており、他の問いでも同じような結果となった。しかし、全ての問いにおいて、「思う」より「やや思う」に回答が偏っている傾向にあった。

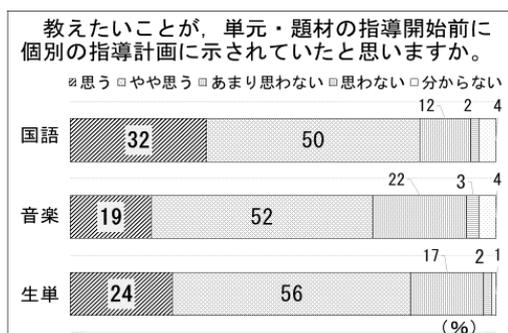


図7

(3) 「指導内容の明記」と「役立ち感」、「指導内容の習得状況」との関連について

個別の指導計画の指導内容の明記（図7）で明らかにしたと「思う」と回答した担任について、個別の指導計画の「役立ち感」の状況に違いがあるかを分析をした（図8）。

その結果、単元・題材の指導前に個別の指導計画に「教えたこと」、つまり、指導内容を明記している担任は、国語87%、音楽82%、生単の60%が役立っていると「思う」と回答しており、個別の指導計画が「役に立っている」という意識が高いということが分かった。

また、個別の指導計画の指導内容の明記で「思う」と回答した担任は、単元・題材の指導で、児童生徒の習得状況に違いがあるかを分析した（図9）。

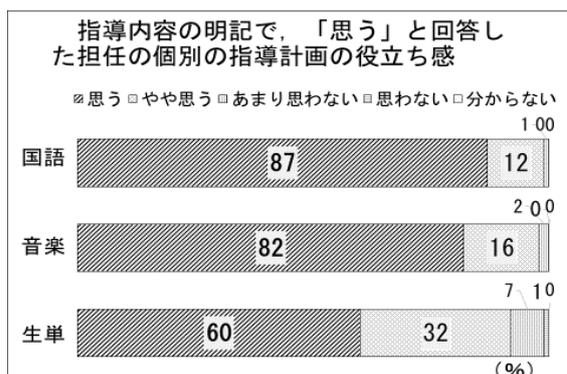


図8

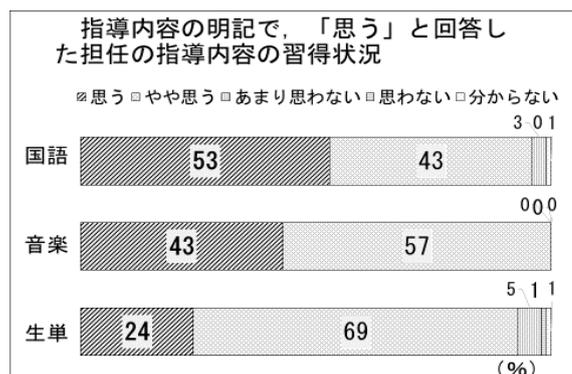


図9

その結果、達成の状況に対する違いがあることが分かった。具体的には、国語53%、音楽43%、生単の24%で、「思う」と回答しており、指導の形態によっては、授業における個別の指導計画の活用状況に違いがあることが分かった。

5 個別の指導計画活用の現状と課題

実態調査の結果から、以下のことが明らかになった。

| | |
|--------|--|
| 現 状 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 個別の指導計画については、教員間の情報共有や保護者との連携に係るツールとして活用していると感じている担任が多い。 ○ 個別の指導計画が日々の授業につながっていると感じている担任が多いものの、その回答は、「思う」より「やや思う」が多く、指導の形態によっても違いがある。 ○ 個別の指導計画に「教えたこと」を明確に記述している担任は、単元・題材の指導後に、ねらいを「達成できた」と感じており、個別の指導計画が役立っているという意識が高い。 ○ 個別の指導計画活用に関する担任の役立ち感については、特別支援学校の教員経験年数による大きな違いはない。 |
| 課 題 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 単元・題材の指導レベルでの個別の指導計画活用が十分ではなく、個別の指導計画と授業とのつながりを工夫する必要がある。 ○ 個別の指導計画の記述内容と単元・題材の指導レベルでの児童生徒一人一人の指導内容の整合性を図るための手立てが必要である。 ○ 指導の形態によって、個別の指導計画の活用状況に違いがあり、指導の形態の特性等を踏まえた活用の在り方を整理する必要がある。 |

個別の指導計画は、授業場面において児童生徒一人一人の教育的ニーズに応え、指導・支援の最適化を図るためのツールとしての役割が期待されているが、今回の実態調査から、多くの担任が授業場面での活用より、情報共有や連携ツールとしての活用に役立ち感を感じていることが分かった。

個別の指導計画が特別支援学校学習指導要領に規定されてから17年も経過しているものの、実態に応じた指導への役立ち感において、「やや思う」という回答に偏っていたり、指導の形態によっては「思わない」、「分からない」という回答があったりするという結果から、個別の指導計画と授業のつながりについて、十分に取り組めていないという現状がある。このようなことから、個別の指導計画活用に何らかの課題が考えられ、活用の工夫や手続きを整理する必要がある。

当課では、単元・題材の指導や1単位時間の授業において、個別の指導計画活用を一層図ることで、「教えるべきこと」が明確になり、児童生徒一人一人の指導が更に充実していくのではないかと考える。

6 今後の計画

- (1) 単元・題材の指導計画作成における指導目標や指導内容を明確にする個別の指導計画の活用の在り方について検討する。
- (2) 研究協力員の所属する特別支援学校において、全体指導計画と個別の指導計画に基づく単元・題材の指導計画による検証授業を実施する。
- (3) 単元・題材や1単位時間における個別の指導計画活用の具体例を提案する。

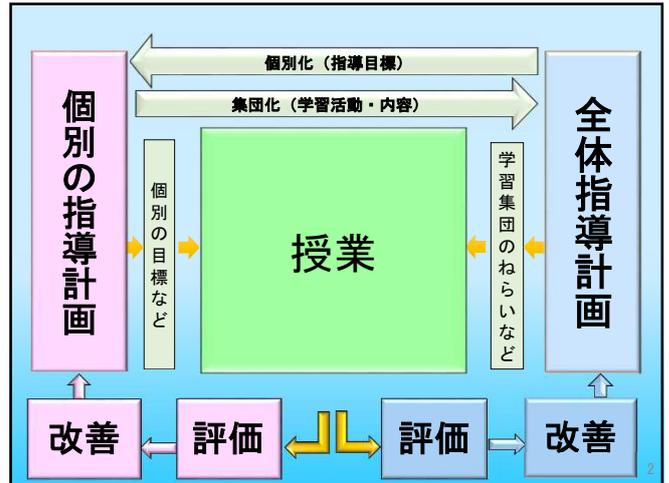
【平成28年度調査研究発表会】
第7分科会（特別支援教育）研究発表

特別支援学校における指導内容の 明確化に基づく授業に関する研究

— 一人一人の確かな学びに応える
個別の指導計画活用の工夫を通して —

新しい自分発見教育センターで...
～学びの一步、還元の二歩～

鹿児島県総合教育センター
特別支援教育研修課



個別の指導計画とは

一人一人の児童生徒の的確な実態把握の下、教育的ニーズに応じた指導目標、指導内容・方法を明確にした実践上の指導計画

活用

個々の指導を最適なものへと
改善・充実させる役割

特別支援学校学習指導要領（平成11年）

各学校で様式や手引などの整備

個別の指導計画の活用

- 実態に応じた指導
- 教員間の情報共有
- 保護者への指導事項の伝達 など

教育的ニーズに応え、日々の学習活動への活用の充実を図る。



研究のねらい

実態調査

個別の指導計画活用状況等の現状と課題

考え方の整理

全体指導計画と個別の指導計画に基づく
指導目標の設定と指導内容の明確化

個別の指導計画を活用した授業の充実

研究内容

平成28年度

- 個別の指導計画活用等に関する実態調査
- 指導内容の明確化のための個別の指導計画活用の在り方の整理

平成29年度

- 個別の指導計画を活用した検証授業の実施
- 個別の指導計画活用に関する提案

実態調査（H28. 10月実施）

| | |
|------|-----------------------|
| 調査目的 | 個別の指導計画活用状況等の現状と課題の把握 |
| 対象校 | 県立特別支援学校全16校 |
| 対象者 | 個別の指導計画を作成した担任 |

7

実態調査

- 対象者 858人（以下の条件を満たす担任）
 - 小学校、中学校又は高等学校に準ずる教育課程及び下学年代替の教育課程、又は知的障害及び重複障害の教育課程のいずれかで学習する児童生徒の担任
- 回答者 814人
- 回収率 95%

8

実態調査

- 調査内容
 - ・ 個別の指導計画の全般的な活用状況
 - ・ 個別の指導計画を活用した授業の現状
国語、音楽、生活単元学習（以下、「生単」とする）
- 調査方法
 - ・ 質問紙法（多選択肢法）
 - ・ 担任する児童生徒一人について回答

9

個別の指導計画の全般的な活用状況について

- 実態に応じた指導
- 前担任からの引継ぎ
- 教員間の情報共有
- 学習の履歴の確認
- 保護者への指導事項の伝達

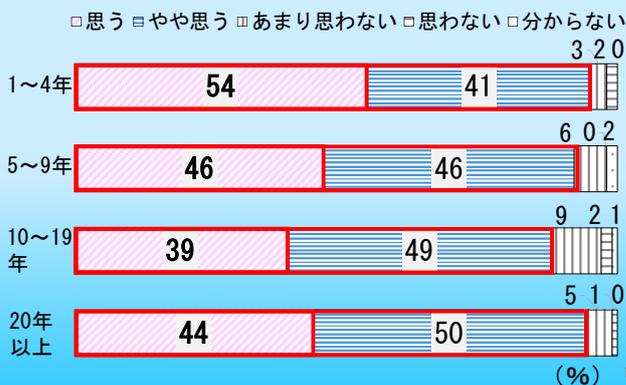
10

肯定的な回答の割合

| 質問事項 | 肯定的な回答 |
|--------------|--------|
| 実態に応じた指導 | 92 |
| 前担任からの引継ぎ | 91 |
| 教員間の情報共有 | 80 |
| 学習の履歴の確認 | 86 |
| 保護者への指導事項の伝達 | 88 |

(%)¹¹

特別支援学校教員経験年数別でみた個別の指導計画の実態に応じた指導での「役立ち感」



(%)¹²

個別の指導計画の全般的な活用状況について

- 情報共有や連携ツールとしての活用が多いこと
- 特別支援学校教員経験年数と実態に応じた指導における個別の指導計画の「役立ち感」とに関連はないこと

13

個別の指導計画を活用した授業について

- 授業とのつながり
- 指導内容の明確化
- 指導内容の習得状況
- 役立ち感

14

肯定的な回答の割合

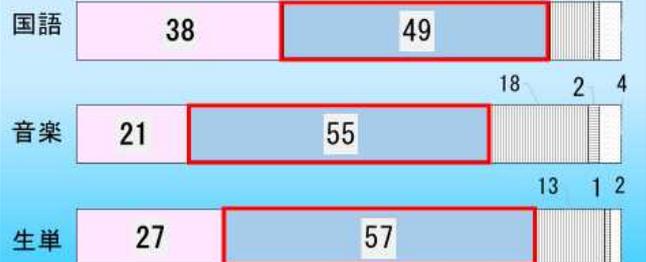
| 質問事項 | 国語 | 音楽 | 生単 |
|-----------|----|----|----|
| 授業とのつながり | 87 | 76 | 84 |
| 指導内容の明確化 | 82 | 71 | 80 |
| 指導内容の習得状況 | 82 | 81 | 85 |
| 役立ち感 | 84 | 75 | 80 |

(%) 15

授業とのつながり

Aさんの個別の指導計画が、日々の授業につながっていたと思いますか。

□思う □やや思う □あまり思わない □思わない □分からない

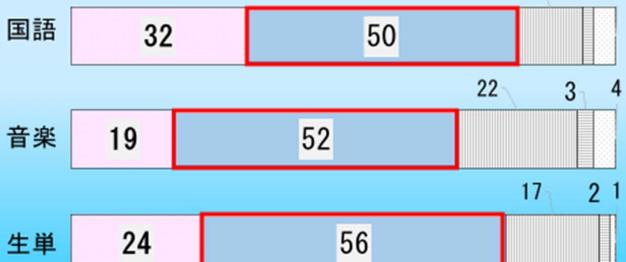


(%) 16

指導内容の明確化

教えたことが、単元・題材の指導開始前に個別の指導計画に示されていたと思いますか。

□思う □やや思う □あまり思わない □思わない □分からない

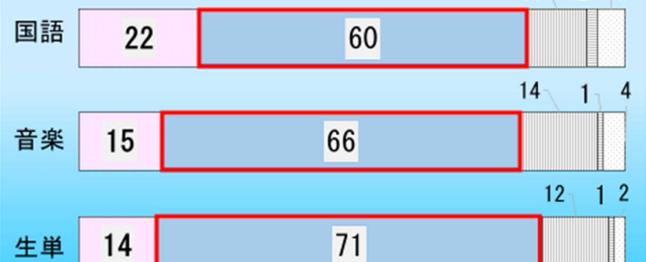


(%) 17

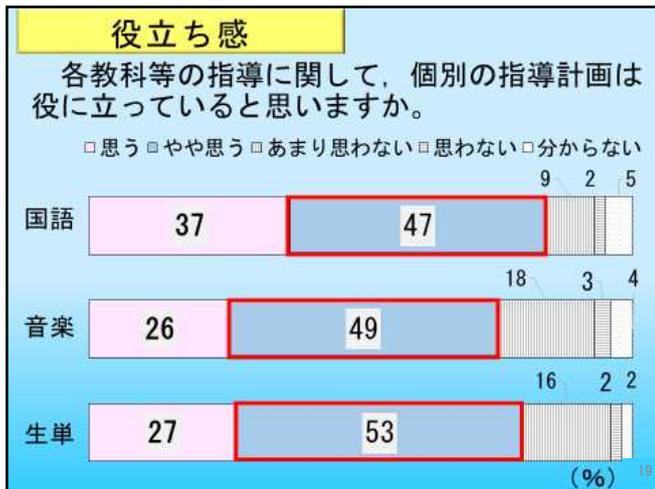
指導内容の習得状況

単元・題材の指導開始前にあなたがねらったことをAさんは達成したと思いますか。

□思う □やや思う □あまり思わない □思わない □分からない



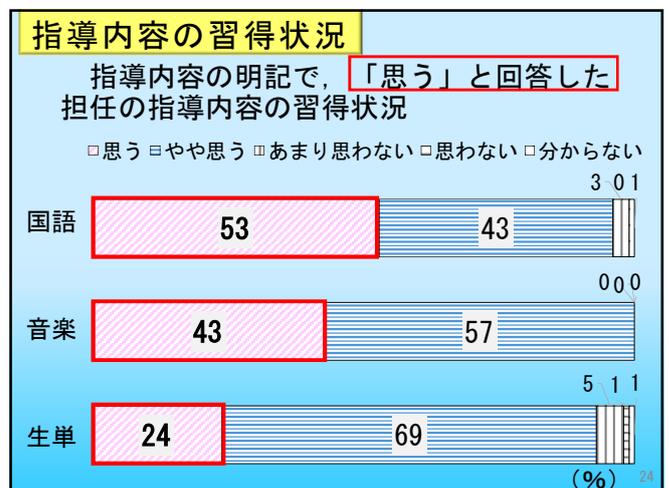
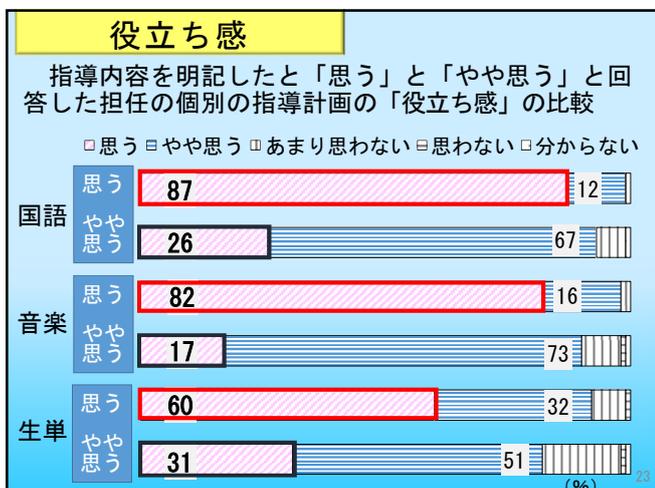
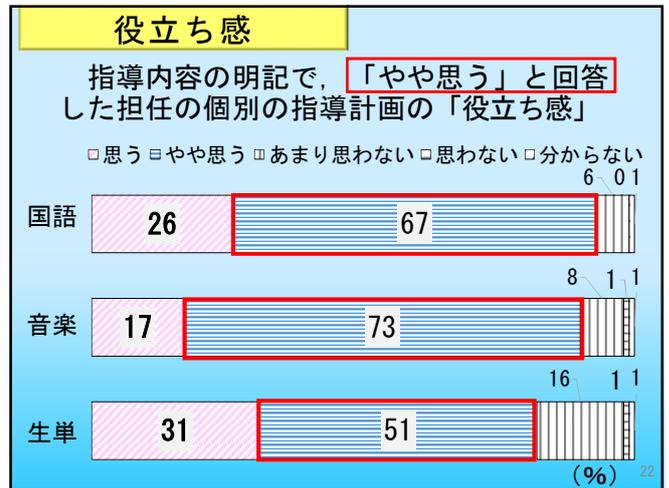
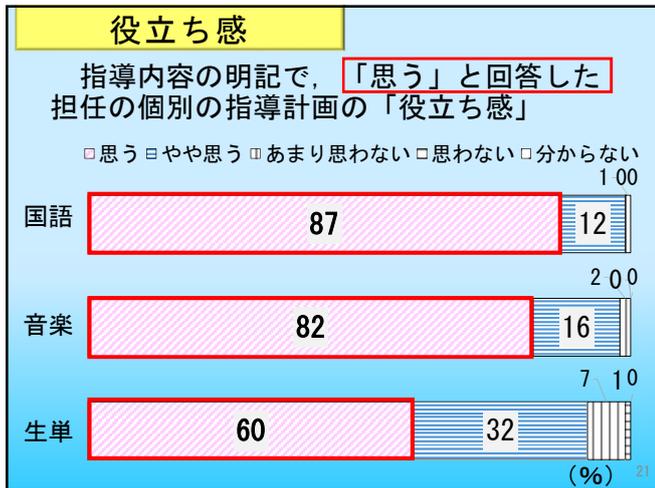
(%) 18



個別の指導計画を活用した授業について

- 個別の指導計画が「おおよそ役立っている」という実感の多さ
- 「思う」より「やや思う」への回答の集中

20



肯定的な回答の傾向について

- 指導内容の明記による、個別の指導計画への役立ち感の向上
- 指導の形態による、個別の指導計画への役立ち感の違い

25

実態調査で明らかになった課題

- 個別の指導計画と授業とのつながりの工夫
- 指導の形態による「役立ち感」の実感の違い
- 個別の指導計画と単元・題材の指導レベルでの指導内容の整合

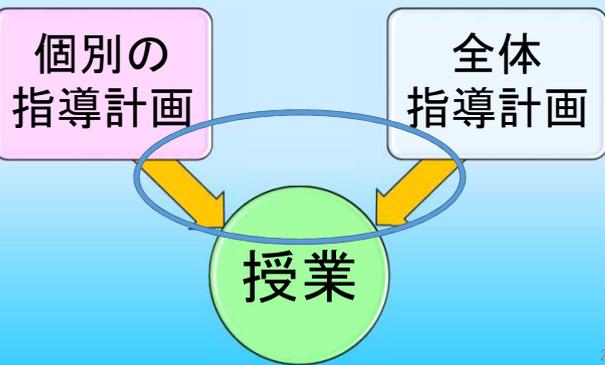
26

単元・題材の指導や1単位時間の授業において、個別の指導計画の活用を一層図ることで、「教えるべきこと」が明確になり、児童生徒一人一人の授業が更に充実していくのではないかと。



27

一人一人の確かな学びのために

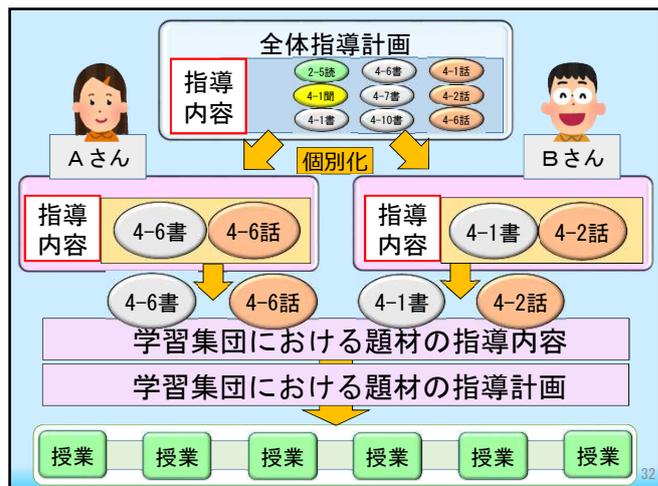
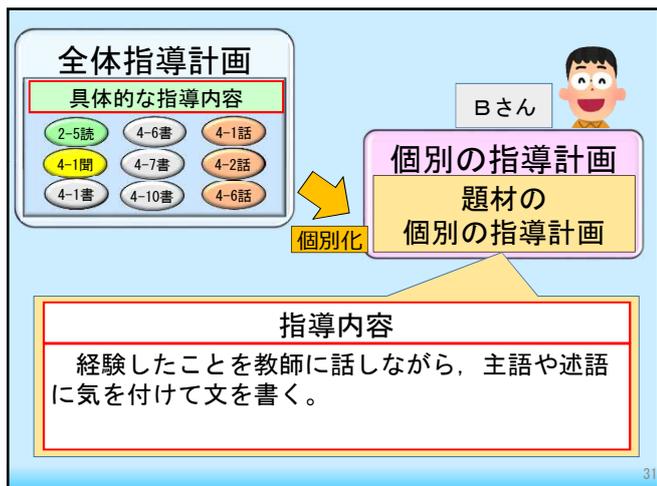


28

| 題材 | 文を書こう | 学年 | 中学部1・2・3年 | 月(時数) | 1月(6時間) |
|-----------------|---|----|-----------|-------|---------|
| 指導目標 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 冬休みに経験したことについて、文を書いたり、発表したりすることができるようにする。 ○ 友達の発表内容を聞き取ったり、思ったことを発表したりすることができるようにする。 | | | | |
| 具体的な指導内容 | | | | | |
| 主な学習活動 | | | | | |
| 1 二語文 | | | | | |
| (1) 助詞 | | | | | |
| を正しく | | | | | |
| たりする。 | | | | | |
| (2) 絵を見て、主語と述語 | | | | | |
| の関係に気を付けてなが | | | | | |
| 文を書く。 | | | | | |
| (3) 書いた文を発表する。 | | | | | |
| 2 経験したことを文に書い | | | | | |
| たり、発表したりする。 | | | | | |
| (1) 順序や文の構成を考 | | | | | |
| へて書く。 | | | | | |
| (2) 書いた文を発表する。 | | | | | |
| (3) 友達の発表を聞いて | | | | | |
| 感想を発表する。 | | | | | |



30



子供をよりよく理解するための
国語、算数・数学 チェックリスト (改訂版)

＜チェックリスト活用にあたって＞

この冊子から選んだ項目は、授業の時間に合わせて、授業から1週間以内で、小・中学校の学習指導要領の趣旨の内容を参考に、授業計画を立て、児童生徒の生活や学習の状況やこれまでの学習内容を把握したり、これからの指導の参考にしたりして活用してください。

※この冊子には、授業以外の学習活動や課外活動の活用も想定されています。活用となることとチェック項目以外に活用したい項目については、備考（自由記述）欄に入力してください。

| | | |
|----|----|---------------|
| 所属 | 学校 | 学年・学期 (年級) |
| 氏名 | | |

平成27年3月
鹿児島県総合教育センター

国語、算数・数学チェックリスト (改訂版)

57

特別支援学校（知的障害）における各教科の具体的な内容の例（試案）

平成28年3月

新しい自分発見 教育センターで...
～学びの一步、進元の二歩～

鹿児島県総合教育センター

特別支援学校（知的障害）における各教科の具体的な内容の例（試案）

58

指導内容の明確化のために

- 「国語、算数・数学チェックリスト」(改訂版)
- 「特別支援学校（知的障害）における各教科の具体的な内容の例」 など

活用

- 一人一人の指導内容を捉える。
- 学習集団における単元・題材の指導内容の整理を行う。

35

今後の計画

- 個別の指導計画活用の在り方の整理
- 研究協力員による検証授業
- 個別の指導計画活用例の提案

36

個別の指導計画に基づく生活単元学習の指導
 — 小学部「展示作品制作」における取組 —

鹿児島県立加治木養護学校
 教諭 横山 武

1 実践

本報告は、学級における生活単元学習「展示作品を作ろう（版画をしよう）」の実践である。

(1) 本児の実態

本児（5年生、男子）は小学部重複障害学級（男子1人、女子1人、計2人）に在籍している。本児の主な実態は以下のとおりである。

| | |
|----------------------|--|
| 制作活動に関する 身体の機能・技能 | <ul style="list-style-type: none"> 四肢の動作に困難さはあるものの、物を握る、腕を動かすといった粗大運動能力は身に付いており、簡単な制作活動であれば、教師の支援を受けながら取り組むことができる。 |
| 生活単元学習における 興味・関心 | <ul style="list-style-type: none"> 季節行事や学校行事では、学習活動の流れが理解できると、落ち着いて参加することができる。 制作活動全般に対する興味・関心はそれほどなく、本児の意に沿わない活動であった場合には、学習活動にやや抵抗を示すことがある。 馴染みのないものを触ることに対し、強い抵抗を示すことがある。 |

(2) A児の個別の指導計画（2学期）の生活単元学習の目標

季節行事や制作活動等において、教師の支援を受けながら、自ら意欲的に一定時間集中して学習に取り組むことができる。

(3) 生活単元学習の年間指導計画

本児の教育課程は、小学部のD課程（自立活動を主として指導する教育課程）である。本単元「展示作品を作ろう（版画をしよう）」は、9～11月の大単元「あきをさがそう」の中の小単元である。大単元の目標等は以下のとおりである。

| 大単元名 | 目 標 | 行事との関連 | 活動例 |
|---------|--|---|---|
| あきをさがそう | <ul style="list-style-type: none"> 様々な人や他校の友達と、いろいろな遊びを共に楽しみ、触れ合う中で、異文化に触れたり、人と関わったりすることができるようにする。 秋の自然や実り、遊びや出来事を体験し、感じたことを表情や動作で表現することができるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> 校外学習 学習発表会 馬踊り 交通安全教室 A L Tとの活動 交流学习 | <ul style="list-style-type: none"> 散策 十五夜（相撲・綱引き） 落ち葉、木の実遊び 芋ほり 校外学習の事前・事後学習 学習発表会の練習 作品展の準備 交流学习の事前・事後学習 |

(4) 単元指導計画立案と個人目標の設定

個別の指導計画を基に、本單元における本児への指導目標としては「学習への意欲的な参加」と「制作活動への取組」の二つの要素を中心に構成することを考えた。

これに対し、本児の実態としては、制作活動全般に対する興味・関心が課題となることが予想された。そこで、前單元である「校外学習」と

の関連性をもたせることによって、興味・関心をもつことができるようにするとともに、素材等にも慣れ親しむことができるのではないかと考え、本單元を計画をした。

具体的には、展示作品作りに先立ち、校外学習で海の生き物を見たり、触れたりする体験を行った。次に、版木となる「スチロールボード製の魚」を用いて魚釣り遊びを行った。このように校外学習から続く流れの関連性を意識させるとともに、本單元で扱う素材に事前に触れておくことで、初見の抵抗感の軽減を図るようにした。

(5) 学びの評価

事前の評価規準は、A児が教師に手を添えることで、抵抗なく一定時間活動に取り組めることとしていた。しかし、実際は、教師の手を添える支援がなくても繰り返し活動する様子が見られ、目標は十分に達成することができた。また、その後の展示作品作りの授業では、今まで苦手になっていた「サンドアート」（色砂を粘着部に付ける活動）にもほとんど抵抗なく取り組むことができたなど、単元を通して落ち着いて活動することができた。

| 次 | 活動名 | 活動内容 |
|---|----------------|--------------------|
| 一 | 校外学習 ※前單元 | ・ 水族館 |
| 二 | 校外学習の事後学習 ※前單元 | ・ ビデオ視聴 ・ 魚釣り遊び |
| 三 | 展示作品作り①（本時） | ・ 版画 |
| | 展示作品作り② | ・ 背景の色塗り |
| | 展示作品作り③ | ・ サンドアート ・ 仕上げ |

2 成果と課題

(1) 成果

2学期が始まる前までに、本児の課題や今後指導すべき内容を確認し、個別の指導計画に記載することができた。また、早い段階から前單元とのつながりを図り、本單元に向けての指導計画の立案や授業の準備等に取り組むことができた。

(2) 課題

現在の個別の指導計画の目標は、学期を通した大まかなものとなっており、客観的な評価がしにくい面があった。また、本児への手立て等に関する記載もなかった。したがって、1単位時間の授業における具体的な指導については、その都度、担任の実態把握に基づいて行うものとなっていた。このことは、個別の指導計画が直接授業につながっていたとは言い難いものといえる。今後、個別の指導計画の目標を、単元レベルにまで下ろしていくことで、よりよい実践へとつながるものと考えている。



写真1 授業の様子

個別の指導計画に基づく音楽科の指導
— 中学部「楽器で演奏」における取組 —

鹿児島県立皆与志養護学校
教諭 今吉 まり子

1 実践

(1) 指導に当たって考慮したこと

- 認知面や体の動きについては、実態差の大きい学習集団で、「自分で楽器を演奏する」ことを目的として楽曲を選定する。生徒がそれぞれ旋律楽器を用いて、曲中の自由なタイミングでの演奏を生かすことができる楽曲の合奏に取り組む。
- できる動きを演奏に生かせる楽器、生活単元学習などの他の学習活動であまり使用する機会のない楽器など、担当する生徒について教師の視点で楽器を選択することで、新しい楽器の演奏の機会や好きな楽器を増やす機会となるようにする。
- 一人ずつの演奏場面を設定することで、教師からの言葉掛けなど関わりをもちながら演奏したり、友達の演奏を鑑賞したりすることができるようにする。
- 合奏中のアドリブ演奏では、自分の順番の時に、好きなタイミングで演奏できるようにし、音を出せたことに対する称賛を受けることで、「もっと鳴らしてみよう」という意欲につなげることができるようにする。
- 「自分で演奏できた」という達成感を味わえるようにするために、教師の最小限の支援で演奏できるような工夫をする。



写真2 授業の様子

(2) 目標設定から活動内容の設定まで

題材の全体目標

- 合奏で担当する楽器について、それぞれの方法により自分で演奏することができる。
- 教師の合図を手掛かりに自分の順番が分かり、演奏することができる。

Bさん（中学部1年 女子）について

「指導関連表」から関連項目の抜粋

基礎課題から

- b 言葉掛けや音のする方向に視線を向けたり、表情で反応したりすることができる。
- d 対象物を視覚で捉え、手を伸ばして距離を確認するなどして、主体的な動きができる。

音楽の年間目標

- ア 教師や友達の声を聴きながら、体を動かしたり、声を出したりすることができる。
- イ 様々な楽器の音や身の回りのいろいろな音に気付き、楽器等を見たり、楽器や補助具に触れて鳴らしたりすることができる。



題材の個人目標

- 楽器に注目したり、音で笑顔になったりして、楽器に触れて鳴らすことができる。
- 教師の合図で自分の順番に気付いて楽器を鳴らしたり、友達の演奏を聴いたりすることができる。

本時の個人目標

- 学期を見たり、音を聴いたりして楽器に気付き、自ら手を伸ばして鳴らすことができる。
- 教師の言葉掛けや楽器の提示で自分の順番に気付き、1回以上鳴らすことができる。



楽器の選定・目標を達成できるようにするために

- 弦に直接指で触れることで、触覚を刺激することができる→ギターを選択
- 弦に触れるだけでは本人に聞こえる音量を得ることはできないが、あまり慣れ親しんでいないギターの音色に慣れ、楽しめるようになってほしい→自立活動専任と連携し、演奏用補助具の開発
- 本人の左手の動きがそのまま演奏につながり、音量も得ることができた。



(3) 題材についてのBさんの評価

- 楽器の提示で、注目したり手を動かしたりして楽器を演奏したりすることができた。
- ギターの音に気付き、表情の変化が見られたり、目を大きく開けたりした。
- 映像の中のギターの音や近くで教師が演奏するギターの音でも表情の変化が見られた。



写真3 教具を用いてギターを演奏するBさん

2 成果と課題

(1) 成果

- 音楽の年間目標だけではなく、基礎課題や生活単元学習、自立活動等の目標が活動内容を決める手掛かりとなった。
- 自立活動専任にBさんの実態を確認し、上肢の動きを生かした演奏用補助具を作成し活用したことで、できる動きで本人に届く音量での演奏が可能になった。
- 音への気付き、手への刺激により表情の変化が見られ、教師が近くで演奏するギターや自分が演奏する映像の中のギターの音でも表情の変化が見られるようになった。
- 視覚での捉え、音への気付き、できる動きを考慮した活動内容を設定したことで、本人の主体的な活動につながり、より具体的な評価が可能になった。

(2) 課題

- 「指導関連表」は、年間の目標や指導内容についてまとめたものである。様々な活動を想定して作成したのではあるが、全ての活動について当てはまるものではない場合もある。本時については、楽器の演奏が上肢を使った活動のため、自立活動との関連が多く、それほど難しさは感じなかったが、学習内容によっては活用が難しくなることも考えられる。

個別の指導計画に基づく数学科の指導
— 高等部「実務（お金）」における取組 —

鹿児島県立牧之原養護学校
 教諭 永吉美鈴

1 本校の個別の指導計画の活用状況

本校の個別の指導計画は、様式1と様式2から構成されている。様式1は、紙面の上半分に自立活動の6区分別に実態を記し、それを基に、下半分に1年間の長期目標と指導方針を担当が記述するものである。数学に関する実態は、「4 環境の把握」に記述されることになる。「計算力が小学〇年程度や一人で買い物ができる」などの記述はされているものの、全ての領域（数と計算、量と測定、図形・数量関係、実務）についての実態が記述されているわけではないため、教科での実態把握を別に行っている（数学チェックリストにより、チェックしている。）。

様式2は、各教科・領域ごとに短期目標（4月～9月、10月～3月）と指導内容・方法及び評価を教科担当者が記述するものである。この記載内容を確認することで、どのような手立てがなされてきたのか、どこまで理解しているのかを確認することができる。数学、国語、くらし（本校特設の教科を合わせた指導）、総合的な学習の時間、生活単元学習などは、生徒の実態を3～4グループに編成して学習を進めており、学年の担当者がな

るべく学年全員の生徒を把握できるように、それぞれのグループを担当するようにしており、それぞれが教科担当者として、様式2の単票を作成している。教科担当者が記入した単票をネットワーク上で共有し、担任が生徒ごとに集約するようにしている。数学以外にも、国語や音楽など多くの教科・領域を担当しているが、国語であれば、自立活動の「5 身体の動き」や「6 コミュニケーション」などに関する実態の記述をする場合もある（例えば、筆記用具を持つ力、手の動き、言語力など）。音楽の場合も同様に、発声や楽器

図1 個別の指導計画 様式1

図2 個別の指導計画 様式2-1

図3 個別の指導計画 様式2-2

図4 個別の指導計画 様式2-3

を持つ手の動きなど、関係するものを記述する場合もある。国語には、「読む、書く、聞く、話す」の領域があり、音楽には、「器楽、歌唱、鑑賞」の領域があるが、全てのことについて、様式1に実態が明記されておらず、前述したような関連事項と長期目標を意識しながら、前年度までの様式2の内容を確認することで実態把握をし、教科等の実際の指導計画に合わせて、短期目標や指導内容・方法を検討している。

2 全体指導計画と個別の指導計画に基づく授業づくり

本校では、「全体指導計画はメニュー表である。」「そこから、生徒の実態に応じてチョイスをする。」という考え方を基に、授業づくりを行っている。

本校の全体指導計画の高等部数学では、1～6段階を2段階ずつの3段階に分け、それぞれの領域で取り組む指導内容表を作成している。その中から、生徒の実態に応じて、行事等と関連付けられるところは関連付けながら、指導内容を選択して指導計画を立てている。今回の授業では、担当しているAグループについては、「実務（お金）」において、A段階の指導内容に加えて、B段階から一部必要だと思われる内容を選択して計画した。実際の指導計画を基に、個別の指導計画様式2の短期目標を設定し、指導内容・方法を検討した。全体指導計画は前年度の担当者が、その年に自分が担当した生徒を基に見直しを行っている。実際に参考にするときには、学年によって生徒の実態も異なり、担当者も変わることになる。よって、PDCAサイクルに基づく見直しは必要であると思うが、全体指導計画については、核となる単元・題材と指導内容については大きく変えることはなく、系統的な指導内容となっている。

また、教科等でどのような内容を選択したのかなどの引継ぎをするためのファイル等が大切になってくる。本校では、くらし、LHR、生活単元学習などグループごとに略案をファイルに綴じて、次年度に引き継ぎ、参考にしている。



写真4 数学「実務」の授業 1

3 授業の実際

検証授業では、「実務（お金）」の学習を行った。模擬硬貨を使いながら、1,000円の等価関係を考える学習である。グループ学習を取り入れることで協力し合って考えたり、ワークシートに記入したりすることができた。授業の実際は、次ページのとおりである。



写真5 数学「実務」の授業 2

4 個別の指導計画活用の成果と課題

(1) 成果

- 本校は、個別の指導計画を4月～9月と10月～3月の2期に分けて作成しているため、じっくり取り組んでいる。
- 「個別の指導計画作成の手引」の中に、『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編』等を参考にして整理した「自立活動の内容の区分・項目別の実態例」が参考資料として添付されており、活用しやすくなった。



写真6 数学「実務」の授業 3

(2) 課題

○ 様式1は、数年分を遡って確認するには、かなりの時間が必要になり、変容が分かりにくいという一面がある。様式2についても、記述式であることから同様に時間が掛かってしまう。様式1の実態から各教科・領域に反映させるには、どのような内容を記述すればよいのか、必要な情報は何か、記入の観点の基準が必要である。

○ 自立活動の内容の区分・項目別の実態例はあるものの、教科等の視点での基準が示していないため、どのような内容を記入するかについては、入学時の資料や担任の観察によって、記入している状況である。

学校によって様式や記入の仕方が異なるため、様式や記入の仕方などを理解するのに時間が掛かり、記入の観点もなかなか理解が深まらなれないと感じている。各学校において、記入の手引、全体指導計画と関連付ける手順があると、ある程度統一した視点で作成できるようになるのではないかと考える。

また、「個別の指導計画」、「個別の教育支援計画」、「個別の移行支援計画」は、実態等の共有ができる部分もあるのではないかと考える。そのことが、授業と関連したり、効率的な作成及び活用ができたりする方法の一つになるのではないかと考える。

《本時の実際》（一部抜粋）

| 過程 | 主な学習活動 | 指導及び指導上の留意点 | 資料・準備 |
|-----------|--|--|--------------------------------------|
| 導入 10分 | 1 始めの挨拶をする。 2 「Good jobシート」に日付等の確認をする。 3 本時の学習について知る。 4 桁の金額を模擬硬貨や模擬紙幣を使って出してみよう。 | <ul style="list-style-type: none"> 「Good job シート」に出席のスタンプを押す 前時の学習を活かすことを強調する。 | テレビモニター パソコン スタンプ |
| 展開 30分 | 4 前時の復習をする。 ・ 1,000円の等価関係を確認する。 5 練習問題に取り組む。 「4桁の金額を出してみよう」 (1) 1人で考える。 1,000円（模擬硬貨のみ） (2) 2～3人組になって考える。 ① 1,450円（模擬硬貨のみ） ② 3,783円 (2,000円分は模擬紙幣) 6 答えを発表する。 | <ul style="list-style-type: none"> 1,000円の等価関係の方法にはどのような方法があるか、全員で考え、テレビモニターのワークシートで、視覚的に確認できるようにする。 1人ずつ1,000円以上になる模擬硬貨を封筒に入れておく。 硬貨の枚数を用いて、等価関係を式で表し、テレビモニターに示して書き方を確認できるようにする。 様々な解答を取り上げ、等価関係が成立していることを確認する。 | ワークシート 模擬硬貨 模擬紙幣 模擬硬貨 電卓 |
| 終末 10分 | 7 本時のまとめをする。 8 次時の予告を聞く。 9 終わりの挨拶をする。 | <ul style="list-style-type: none"> テレビモニターのワークシートにまとめを入力し、全員で確認する。 実習後に、10,000円の等価関係について学習することを予告する。 | |